

すみりんニュース No.91



編集・発行：公益財団法人 住吉隣保事業推進協会

編集発行人：理事長 友永 健三 *『すみりんニュース』は、2カ月に一度発行しています。

公益財団法人 住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山 東 5-6-15
TEL (06) 6674-3732 FAX (06) 6674-3700 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

(この号の内容)

- 「人権のまちづくりを 考える」すみよし連続講座 記念講演～私 にとっての「アイヌ」～関根摩耶さん…1-15
- 連載Vol.14 けんぞうの視点『全国部落調査』復刻版出版事件に関する東京 高裁判決の評価と今後の課題
～「差別されない権利」を認めたが課題も残された 友永健三(公益財団法人 住吉隣保事業推進協会理事長) 16-19
- 住吉隣保事業推進協会のうごき……………20

今号では、2023年5月20日に開催した「人権のまちづくりを 考える」すみよし連続講座記念講演～私 にとっての「アイヌ」～の講演録を掲載しています。当日はオンラインによる講演となりましたが、会場には53 人の参加がありました(事務局)。

「人権のまちづくりを 考える」すみよし連続講座記念講演 ～私 にとっての「アイヌ」～ 関根摩耶さん

よろしくお願いします。はじめに自己紹介からさせてく
ださい。イランカラブテ。

今、アイヌ語で自己紹介させていただきました、関根
摩耶と申します。関根摩耶は、日本語としての名前です、ア
イヌ語でいうとノトといいます。摩耶というのは、神戸の摩
耶山、山からきている名前です、ノトというのは、海の風です。
静か風のことを指している言葉です。

私は、平取町二風谷といわれている場所で生まれ育
ちました。その後、神奈川県横浜市に住んでいて、どのよ
うにアイヌ語を、アイヌ料理を、アイヌ文化を広めることが
できるかを 考 えながら生活しています。

昨日、コロナかもしれないということがあって今日はオ
ンラインになりました。今日はごめんなさい、頑張りますの
でよろしくお願いしますということをアイヌ語で自己紹介
させていただきました。

私は一昨日までニュージーランドに行っていました。
テレビのロケだったんですが、一緒に行った方が帰国後
にコロナになりました。せっかくたくさん準備していただ
いたり、みなさんに会えるのを楽しみにしていたんです。し
かし、今回行ってお互い気持ちよくない会になるよりは、
本当に私 心も心地よく行って、みなさんとたくさん話したり、
今後も続けていけたらいいなと思っているので今回は
zoomになりました。ぜひ 話をたくさん聞いていただけた
ら嬉しいです。よろしくお願いします。



早速ですが画面共有をしながらお話ししたいと思います。

<平取町の紹介>

先ほどご紹介したところは、平取町の二風谷というところです。この北海道内の赤いところが平取町です。二風谷は、この平取町を拡大した右下の図の中の「二つの風の谷」と書いてある二重丸のところですよ。人口300人ぐらいしかいない小さな集落で私も生まれ育ちました。そのなかの8割以上がアイヌにもルーツを持つといわれているぐらいです。今もその土地に根付いて、アイヌの言葉や文化、日常生活を送っているなかで気づけばそれをしているみたいなのが残っているような場所です。古くから一番大きな集落があったといわれている場所ですごく謂れのある地です。写真は、オプヌプリと呼ばれる穴が開いている山です。文化を創造したカムイと呼ば



れているオキクルミが射った矢が開けた穴だといわれている山です。伝統的な家屋、チセ(家)と呼ばれる茅葺の家を復元しているコタン集落があったり、博物館、資料館などいろんなものがあつたりしています。

若者が働けるまちとして、地域おこしでアイヌ文化や工芸を学ぶ枠を設けています。地元に戻ってくる方も多いですが、比較的外から文化やその土地の特色に興味を持って移住してくるような場所です。二風谷は田舎なのにすごく若者が多いことにびっくりしたという方もいます。若い人たちが頑張っている地域の文化を地域の個性を残していこうとしている場所だと思っています。

四季が豊かなところできれいなところです。冬、雪が15cm降ったら大雪というぐらい、太平洋側なので

雪も少なく寒くない、暑くない。そんな地域だから古くから大きな集落があったといわれています。食べ物も文献によれば、川に鮭がのぼっていたのでそこに棒を立ててみたら倒れないままのぼっていたとか、丘の上に立って「あそこ赤い植物は何だ?」と和の人がアイヌに聞くとアイヌが一斉に走り出した。赤い植物だと思ったのは、全部鹿の背中だったとか。いろいろ食べ物が豊富な場所として川があつて山があつて海もそんなに遠くない場所として古くから栄えていたといわれています。

平取町は第一次産業に重きをおいています。平取和牛や桃太郎トマトの生産、寒締めほうれん草、お米などを作り、町の農業で比較的大きな収益を得ています。観光業、あとは子どもたちの教育、無料で高校生まで通えるような塾が町内にあったり、先生も泊まり込みで札幌から呼んで年中先生が毎日ついているような塾があつたり、第一次産業と連携して私たちの文化が成り立っています。

特色の一つとして平取町にある二風谷小学校は北海道で唯一アイヌ語の授業の時間が設けられています。私が通っていたころはなかったんですが、今は年に10時間、月に1回1時間くらい、アイヌ語の勉強時間が設けられています。その他にも年に30時間、総合学習の時間、地域学習としてアイヌ文化を選択して学ぶこともできます。生徒によっては年に40時間くらいは小学校でアイヌ文化、アイヌ語を学ぶ時間がつくれるような場所です。そんな場所で私が子どものころはアイヌ語の授業もなかったですし、アイヌ語教室に通っている子たちも3分の1くらいでした。今は学生の半分くらいはアイヌ語教室に通っています。ちょっとずつ増えてきているような状況です。

<生い立ち>

私はすごく恵まれた環境で生まれ育ちました。母方が工芸をしている家庭だったので小さいころから刺繍を習ったり、木の皮の織物アットゥシを剥ぎに行くのを手伝って、山に行つて木の皮を背負ってきたりとかいろんなことをして育ちました。

私が保育園ぐらまでは二風谷は電波も弱いような場所、α u がかるうじて通じるみたいな場所でした。遊びといっても学校帰りに子どもたちはチャンバラをしたり、山に行っておやつにしたりしていました。そういうところでたくさんルールみたいなものを学びました。私の地元は、いかに頭をよくするか、テストの点数をとるか、就職しやすい子にするかというよりは、いかに自分たちで生きていく力をつけるかということをおしを教える場所だったと思います。どうやったら魚が獲れるかだけでなく「魚を獲ったら腸はキツネにあげてきなさい」とか、「キノコを採りに行くときは必ず網々の袋を持って行ってその袋に入れて、胞子を落としながら帰ってきなさい」、「木を折ってもそのまま挿し木してきなさい」、「クマにあったらこうしなさい」、「山で迷ったらこの方角に行きなさい」とかいろいろそういうことはばかり言われて育ちました。はじめて一人暮らしをした時も、親には「あっちの山が東だ」と方角を教えられました。そのくらいどうやってその土地で、その文化や自然を尊敬して生きていくのかを教えてくれた場所です。

言語については、私の世代にしては珍しく、アイヌ語を話せるおじいちゃん、おばあちゃんに幼少の頃出会うことができました。どこのコミュニティでも一緒だと思いますが、アイヌといってもアイヌ同士で、あっち側はあーだ、こーだ、といういろいろあります。私の父はアイヌにルーツを持っていなかったのですが、和人というルーツを活かしているいろんな地域に気軽にやって教えてもらいました。私はそれに続いて行っていました。二風谷の方ではじめて国会議員になられた萱野茂さんのところにも通いました。萱野さんは、アイヌ語を書いてからそれを日本語に訳すというぐらいアイヌ語と慣れ親しんできた、アイヌ語を第一言語としている方でした。中本ムツ子さん、千歳のおばあちゃんです。私の母は、平取のアイヌとして「千歳になんで通うんだ」という疑問があったらしいです。でも、父は和人としてうまくバランスをとる人だったので、いろんな地域に連れていってくれました。こうやってアイヌ語を身近に感じながら育つことができました。母方は工芸をしていたので工芸も習えました。父は常に車や家の中でアイヌ語の力

セットテープを流しているような人だったので、この年にしでは恵まれている、自分で自分の文化を学ぶことができたラッキーな環境で生まれ育つことができました。

海外に行ってお先住民と呼ばれているマオリとか、サーミ、ハワイアン、いろんな人々と交流したりしながら生活しました。私は11歳で親元を離れて、その後寮に入ったり、一人暮らししたりして二風谷を離れました。18歳くらいの時に自分たちが何者かを知っていて、自分たちの役割意識をきちんと持って伝えようとしていて、生きていく自信があるからこそ何かが起こっても余裕がある二風谷のおとなたちを見てきたので、やっぱり私にはかっこよく見えてそうなりたかったです。

地元や家族、友人、知人、育ててくれたみんなに何かできることはないかと考えた時、そこに通じてきたのがルーツでした。私自身がアイヌとして生まれてよかったと思っていることを形にして、口にして表現し、アイヌのことをまずは知ってくれる、認知してくれる人を増やす活動するのが私にとっての一番の親孝行、地域孝行みたいなものにもなると思いました。そうしてはじめてのがラジオやYouTubeです。ラジオで「先生」と呼ばれるようになったから、アイヌ語を本気で勉強しないととか、誰かしらに求めてもらえるから頑張らないとっていうので、今もこういう立場をいただいています。

最近講演会もしますが、コラボみたいなこともしています。お酒づくりやゲームづくりです。他にも例えば林業では、需要の高い針葉樹をどうしても植えてしまう。でも、遺伝子を組み換えられている針葉樹はキノコができない種類もあるし、循環がなくなってしまう。そんななかで、私たちが古くから持っていた知恵を渡して広葉樹に需要をつくる。針葉樹がある程度一周したら、広葉樹を植えて山の土壌をもとのPH、酸性からアルカリ性に寄らせて、そこに需要をつくるということに取り組んでいます。スイーツづくりや、講座などいろんなことをしています。

中学から高校にかけて、地元を離れていたのは、いろいろ理由があります。やっぱりアイヌということも一つの理由ではあるかもしれないですけど、それよりも家族とかかかたわたり方です。私の場合は小さいころからメディア、

テレビに追われることがあったので、周りから意味をつけられたがる。「摩耶さんはアイヌとしてどう思いますか」とか、「アイヌってこうなんですか」という、関根摩耶を見るより先に肩書きやその人のルーツを見る社会がアイヌの世界観とは全然違っていました。アイヌの言葉では、民族、国籍や人権、差別、多様性というものはありません。それらを当たり前にして伝えているからこそ言葉がないんだという感覚を持っていたのに対して、外からの文化はやっぱりそれを求めたがるところも私にはすごく疑問で地元を離れたいというのが勝って、地元を離れました。

<家族の紹介>

私の家族の紹介です。おじいちゃんは、貝澤守幸です。工芸がうまい人で、人望がすごくあって、たくさんお弟子さんを抱えていました。40代で40何年前に亡くなったので、私は会ったことがありませんが、未だに地域でいつも名前が出るような人です。二風谷にとって偉大な表の顔が萱野茂なら、裏は貝澤守幸といってくれる人もいるぐらい地元のために動き続けた人です。

貝澤ハギは、私のひいおばあちゃんです。ビジネスがうまい人です。アイヌは狩猟民族という感覚を抱かれることがあります、実際には交易の民族、ビジネスの人たちです。ビジネスセンスがあったと思います。彼女はアイヌ語もすごく話しますし、刺繍や織物もしながら料理もして、ことあるごとに祝詞とか精神っていうところもきちんと伝えていたひいおばあちゃんです。

貝澤雪子は私のおばあちゃんです。母のお母さんです。83歳になりますが、今も織物で活躍していて、第一線で常に仕事をしているおばあちゃんです。正月の元旦から働くような人です。口癖は「苦労は買ってでもしなさいって」といつも言っています。うちの家族は全員そうですが、子どもたちがアイヌだからっていじめられていても守ったりしない。誰かしらが傷ついたり、喧嘩しあったり、痛いことをされたりしているのを見て守らないんじゃないくて、あえて干渉しすぎない家族です。その代わりにそこから「痛みを知りなさい」というのがみんなの教えです。痛みを知ることで人に優しくなれたり、自分はそうしないでおこうと思ったりとかするっていうので、「すごくアイヌってい

うのは得なんだ」って言っているような家族です。おばあちゃんもいつも「苦労は買ってでもしなさい」って言う強いおばあちゃんです。でも、お茶目な乙女なところもあります。私は小さいころからおばあちゃんと同じベッドで寝ているんですが、未だに帰省したら必ずおばあちゃんと一緒に寝ています。

父は兵庫県出身です。父の父は奄美大島出身で、じいちゃんは仕事を探して関西圏に出てきました。じいちゃんは奄美出身ですが、父は尼崎で生まれ育ちました。日本一周の旅をしている時に北海道にたどり着いて、そこでの役割、自分にしかできないことを探しているうちにアイヌ語にであって、今はアイヌ語の「先生」として働いたり、職場でもアイヌ語しか使わないような職場で働いたりしています。アイヌ語でしか父が話さないのので、父のところにくる新人社員さんは、アイヌ語を覚えなきゃいけない、ちょっと変わったところで働いています。厳しい父ですが、自分にとっての正義や軸、正しいことがあって、そのために本当に頑張っている父です。

母は関根真紀といいます。工芸家です。すごくお茶目で、柔軟でバランス感覚のいい人です。私は小さい頃からいつも刺繍や工芸をしていましたが、母は、私に文様までは書いてくれて、「あとは誰々に教えてもらってね」っていうぐらい、いろんな人たちに甘えるのも上手でした。だから私も母のおかげでいろんな人たちにかわいがってもらって育つことができたと思います。

大家族のなかで生まれ育ちました。毎晩10人、多い時は40人集まって食べるような家族です。「赤ちゃんが生まれたらテーブルの下に置く」とみんな言う。新生児でハイハイして出てこようとしたらテーブルの下にまた戻す。そしたら子どもたちに踏まれないですむから、いたずらされなくてすむからっていうぐらいすごい大人数でした。他の地域から来た人を見ると異質に感じるというぐらい近くて信頼し合っています。これだけ近いと嫌なこともあるんですが、それよりもいざという時に自分たちには家族がいって地元があるという強みをきちんと持っている人たちだと思っています。

<アイヌとは>

アイヌとは、日本の先住民族です。人口とかよく聞かれるんですけど、たくさん混ざり合っていて、どこからがアイヌなのか、血の問題なのか喋っている言葉なのか文化なのか、わからないので私もよくわかりません。ただ一応日本の先住民族とされています。北海道を主に居住しています。「主に」というのは意外と広くて秋田より北、仙台より北に居住していたといわれています。北は樺太の南半分、あとは千島列島の先、北方四島を含む先の方までです。よく思うんですが、北方四島を日本かロシアかという前に絶対アイヌのだろうと思ったりします。それぐらい広くて、古くから先住していたといわれている民族です。先日もウクライナの戦争でロシアのプーチンが、アイヌはロシアの先住民族だと発言して、アイヌ界限では騒がれていました。ここもまたおもしろくて、例えばアイヌはもともと土地という概念を持っていない民族です。なぜかという食べ物ものに困らないくらい食べ物があったといわれている北海道なので、「この山菜はどちらのものか」といちいち争わなくてもいい。他の国に関しても民族という概念を持たないような民族なので、土地というものをそんなに強く意識しない人たちです。多分今もそれは受け継がれているから、私たち家族のなかで「ロシアになったらどうする？」みたいな話が出て、ロシアになったら国籍が変わるだけだべ」というぐらい、その場を臨機応変にする柔軟な部分がある民族なんだろうと私は捉えています。

アイヌ語は、孤立した言葉といわれています。例えば琉球の方にも独自の文化や言語を持っている人たちがたくさん、いくつもグループがあると思います。でも、それらの言葉は日本語との類似性がある程度あるのに対して、アイヌ語は本当に他の言語、日本語やハングル、大陸の方の言葉、中国やロシアの言葉との類似性が今のところ見られていない言葉です。どこから来たのか未だにわかっていないといわれています。もともと文字を持たない言葉。文字を持たないからこそ制限がない。でも責任感強い言葉がアイヌ語だと思っています。例えば私たちの感覚だと、桃太郎は桃から生まれて鬼を退治しますが、

私の家族は、桃太郎はパイナップルから生まれて、最後は鬼と結婚してもいいくらい。極端なことになってしまうと、戦略として何かを書き記さないの、物語を変容しやすい、時代に合わせやすい、そんな側面を持っていると思います。

文字を持たないからこそ、重要な自分たちの秘伝は、信頼している人にしか伝えません。人として信頼されたり、求められたりする人になることに重きをおいている文化でもあると思います。文字を持たない分、口承文芸が何千何万と残っていて、文化と切り離せないというのが言葉です。危機に瀕する日本の言語8つのなかで極めて深刻とユネスコに指定されています。2年ぐらい前までユネスコでの学会で、「アイヌ語を話せる人はもういません」ぐらいの発言がされていて驚きました。私たちから見ると、アイヌ語で会話をしようと努力してアイヌ語で日常会話をしている人は、5年ぐらいで増えてきています。私と同世代のカップルがアイヌ語で家でも会話をこころこころと試み、子どもを産んだらアイヌ語で育てたいという人もいます。アイヌ語が現地では生かされていても、どうしても表には出にくい。危機に瀕するといわれていますが、私の感覚ではあんまり切羽詰まっていらないです。

そんなアイヌ文化の身近な部分、有名なのはアイヌ語の地名です。北海道には95%以上、関東圏や東北にも当たり前のようにあります。先ほど伝えた名前のノトは、能登半島の能登と同じといわれています。遠くは九州までアイヌ語が由来じゃないかといわれている地名が残っていたりします。アイヌはどこで生まれ、どこでその文化を築き上げているのかというのは、未だにわかっていない部分です。他にも借用語として、ふだん使っている昆布もアイヌ語です。シシャモも、ラッコやトナカイ、オットセイもそうです。アイヌ語から日本語にいつているものもあれば逆もあります。例えばペコ。日本語の東北のペコ、牛からきている言葉です。アイヌ語は牛のことをペコといいますが、それは日本語からアイヌ語に入ってきている言葉です。あとはトノ。殿様の父という意味ですね。濁酒みたいな濁った酒のことを指します。あとは逆に、パスイ、箸ですね。カムイ、神。牛の骨をポネっていうんですけど、骨、ポネと

か、どっちが先にできたかが未だにわかっていない言葉もたくさんあります。ただ言い換えると、そのぐらいしか類似性がない。文法でこんなところが一緒だとか、こういう文字の成り立ちが一緒だ、単語はこうやってつくられている方法が一緒だっていうのがなくて、むしろお互いに借りてきている言葉、借用語が似ているのが、アイヌ語と日本語です。

他にもアイヌが交易で渡していたものが、慣用語になっていたりしますし、意外と身近なところにあったりします。雑誌の『non-no』の名前は、花という意味のアイヌ語で、実際に『non-no』さんは公言しています。最近はお米の「ゆめピリカ」もそうです。ピリカ、「いい」とか「かっこいい」とか「美しい」という意味の言葉です。また、アイヌ語は、ロマンチックな言葉ともいわれています。例えば、考えるという動詞を、私たちは、「ヤイコシラムスイエ」「ヤイコシラムスイバ」どちらかを使います。分解すると、自分で自分の魂を揺らす、自分で自分の魂を揺らすの複数形があります。考えるという一言を分解できる言葉で話したりします。「恋に落ちる」とか、「ひと目ぼれ」というのを、「ウオシクコテパ」といいます。互いに目と目がくっついて離れないという意味です。そうやって分解できる言葉なので、ロマンチックに感じることも多いような気がします。

アイヌ語も方言がありますし、アイヌ語といっても一つじゃありません。新しい言葉もたくさん生み出されています。例えば、ちょっといじるような感じで、「バカしてるね」というときにアイヌ語だったら、「エパタイ」という言葉をもともと使っていました。でも、それが日本語と混ざって、「えぱってる」、走ってるとか、何々ってという「て」をくっつけて、えぱってるっていうのが今は当たり前に使われています。それがアイヌ語か日本語か、北海道弁なのか、みんな知らないぐらい新しい言葉が作り出されている現状もあります。

たくさん美しい光景もあります。つい先日も、梅田の阪急でやっていたんですが、伝統的工芸品です。アイヌは基本的に木と生きる民族といわれています。お墓も何も木でつくります。なぜ木でつくるのかというと、朽ちる

からとったりします。何十年も何百年もその土地で残るのではなく、循環して、朽ちて腐ってその土地になっていくからと。だからお墓も民具も基本的には木でできたものが多いです。そのなかでも、「アツウシ」は、木の皮を剥いて何時間も煮たりして、何層にもなっているのも剥がして、手で割いて、手で結んで手で寄りをかけて織る手間ひまかかっているものです。

これが私のおばあちゃんと猫のパンダです。パンダは写りがりなので、カメラを向けたら必ずいる猫ですけれど、ばあちゃんはこれをもう60年以上やっています。色もすべて草木染めです。



先ほどアイヌ語がすごくロマンチックだと話しましたが、言葉にはその文化が表れています。例えば私たちは今、水洗トイレに慣れて、自分たちがどうやってする、自分たちで出したものをきちんと戻しているのか感覚をつかみにくいと思います。そこをアイヌ語から見ると、「何々をうんちとして排出する」みたいな動詞がたくさんあります。私の先祖は何を食べたから何を出したとか、何を食べて何をどこで出すとか、あのクマがこれを食べたというのを出しているからこういう性格だろうとか、それすらもつながっている。それが言葉に表られているんだと思います。アイヌ語の場合、クマを表す言葉は80単語以上残っています。一方、色を表す言葉は赤と白と黒とその他の他です。青でも黄色でも紫でも全部その他の色になるんです。なぜそんなに色が少ないのかというと、わけでもキリがないからです。実用性がないというんです。ばあちゃんの場合は、もともと赤や黒、白が主流だった染

文化を自分で採りに
行った山菜や花、木の
根っこを使って、北海道
のもので染めて織物を
します。文化や工芸は、そ
の時代にあわせて新し
くその価値観につくり出
されている部分も多いと
思います。ばあちゃんが
織ったものに私の母が
刺繍を加えた着物がこれです。こういうのを見せると、
「アイヌ文様に意味ってあるんですか？」と聞かれます。
実際には意味はないといわれている説も多いです。ただ、
アイヌって自分で自分にものをあまりつくってはいけな
い。自分のものを作るときは、死に装束をつくるときとい
う方をします。誰かにものをつくる、人は誰かにものをつ
くられる人でいなければいけないという教えが強くありま
す。誰かのためにつくるものは一針一針思いを込めます。
彫るときも彫刻刀を入れるごとに、この人に災いが起き
ませんように、病氣になりませんようにと思う。だからこそ
すごい力で、魔除けやお守りとして使う人もいます。ただ
カッコイイからつくる人もいます。研究者が文字として何
かを比較したくなったときに、この文様や言葉の意味は
何だ？どこからきたかという意味や答えを求めたがること
で結果として文化は保護、伝統という言葉に入れ込まれ
て、そこから出ていくことが難しくなります。すごい強い力
が働いてしまうことがあると思うので、私はそういう
文字が持つ、特に文字文化が持つ言葉の制約、力につ
いて普段は非常勤講師として話しています。

いろんな美しい工芸があります。この2つは比較的現
代につくられているもので、右上はコラボですね。他の伝統



的工芸品とコラボしたものです。他にもモダンなデザイン
のものも母やいろんな人たちが作っています。

<アイヌの世界観>

アイヌは、全てのものに魂が宿っていると考
えます。自然や食べ物だけではなく、人間がつくり出したも
の、今私が話しかけているパソコンも、ペットボトルも、テ
ーブルにも魂が宿っていると考えます。例えばテーブ
ルに何かをこぼした時、人によっては「拭くな」というん
です。なぜかという、「テーブルが飲みたいから人間にこ
ぼさせたのに、何で拭くんだよ」という教育が今も現場
ではあります。

私が最近おもしろいと思っているのは、いとこの子ど
もが小学校にあがって、落ち着きがなくてずっと走り回
てしまふ。担任の先生が「全然座ってられない」と困
て電話をかけてきてきました。家族会議をして、学校に
「椅子が悪いから座ってられないんだ」といいました。
結局クッションつけてもらったりいろいろしました。そのぐ
らいいろんなものに魂が宿っている。狩りに行った時に、
正しい人間が射った矢に当たらない獲物はひねくれてい
るとして、捕らないですし食べません。ちゃんと当たった
獲物は素直な心のいい獲物だとして感謝を述べてきち
んと送り返します。そうすることでその獲物は、正しい人間
としてまたあそこに行きたいなと思って何回も遊びに来て
くれる。そうやって循環していると考えています。世の中
にある全てのものは、人間の役に立ちたがっているの
で人間の役に立つことでカムイの世界に送られて、位が上
がったり人間の役に立つことで正しく盛大に送られるこ
とでカムイの世界で、例えば「二風谷」という場所に行
てみたけどすごく最高なところだからみんな行ってごら
ん」という噂話を広めたり、「住吉に行ってみたらこん
なに美味しいものがたくさんあったからぜひみんな行って
みたらいいよ」という口コミを広めてくれたりする。カムイと
人間はどちらかがエライというのがなくどちらかという
切り離せないパートナーみたいなものです。カムイが悪い
ことをしたとき、例えばコロナみたいなものもそうですね。
コロナみたいなのがきたときは「病の神よ、おさまって
ください」とお願いするんじゃなくて、わざと家におびき寄せ



て、つまらない話を三日三晩聞かせるとかいいます。そうすると嫌になって病の方から逃げていくといういい方をしたりします。川で誰かが溺れ死んだら、川に向かって「この野郎、何してくれてんだ」と抗議したりします。神がエライわけじゃなくて対等であるというのがアイヌの世界観の特徴です。対等であるからこそ成り立つカムイの世界。

では、何からカムイかというのはあくまでも人間が認定します。私にとって携帯電話は重要なカムイかもしれないですが、誰かにとっては使い方もわからないし重要でもないかもしれない。ただ私が意識していないものでも誰かにとってのカムイかもしれないならとりあえずリスペクトしよう、丁寧に扱おうみたいな文化です。そういうカムイの世界でおもしろいのは、例えば木を切りに行った時に、「この木にしよう」と話してしまうと他の木が嫉妬して節だらけになったり、ひねくれたりしてしまう。木を切りに行く時は静かに行きなさいといひます。火のカムイはおしゃべりだから、火のカムイの前で話すことは気をつけなさいとか、そういう性格も伝わっていてそれぞれの性格とどう関わっていくのかという教えもあります。カムイは、例えば鹿は一つの魂を持っているから一つのカムイだっていう感覚はなく、鹿を切ってぶつ切りにしたその肉の一片、一片にも魂は宿るといいます。それを鍋にして、水蒸気になった水滴・結露ですら魂が宿っている。意識すると魂が宿るといいます。余すことなくきちんと感謝をして使い切る。何か余してしまう時にも言い訳をつけるのがアイヌ文化です。魚を獲った時も腸を意味のないものにしてしまうとカムイが怒り「もうあそこに行っても丁寧に使ってももらえないからあそこに行かないよ」って言う。「その腸は自分たちは食べないのでキツネにあげますね、キツネさん食べてくださいね」って自分たちはきちんと使い切るっていう言い訳をすることで、カムイはそれをわかってくれて、コミュニケーション不足がなく、わかりあえて何回も遊びに行きたいって思ってもらえる感覚を持っています。だからこそ、いろんな部分を民具にします。鹿の膀胱、鮭の皮を自分たちの身の周りの道具にします。ゴミを直訳する言葉を持っていません

が、そのぐらいいろんなものをいろんなものに使い切るような文化です。

もう一つ精神性の話をすると、数年前に地元で震度6強の地震がありました。朝4時、5時ぐらいで私も急いで電話をかけたらずんば全員無事でした。「どうだった？」って聞くと人間の死者・行方不明者が何人だったという話より先に、あっちの山が壊れたとか、山や川の心配をしはじめたんです。未だに山や川にお見舞いに行っているんです。私のおばあちゃんも家族もみんな土地につながって尊敬して対等に向かい合っているところって、やっぱり薄れてきてしまっているなかですごく誇らしく感じました。また、地震が起きたことを「シャワーに浴びた」っていういい方をしたんです。誰にでもいえることではないんですが、私は一理あると思います。飛行機に乗ったときに地球は吹き出物だらけでみんなアトピーみたいになっていて、全部建物も立って、山も全部一色になってしまっている。植林で同じような木ばかりを植えられてしまっている。だから地球もシャワーを浴びたんだねっていうのを土砂崩れを差していったんです。そういう価値観を正しい、正しくないじゃなくてきちんと考えられる人のなかで私は育つことができて幸せだなと思います。

<食文化の話>

食文化の話。いろんな美味しいものがあります。余すことなく食べるというぐらいなので鮭の皮のゼラチンで作るゼリーとかいろんなものがあります。チタダは、魚の身、骨、エラ、皮全部一緒に叩くナメロウみたいなものです。すごいのが、それを食べるだけじゃなくてどうやって臭みを消すか、美味しく食べる方法を知っていることです。次回は、そういう美味しいものをたくさん食べながらやりたいと思います。いろんな食文化があるんですけど、現代風にアレンジしたりしています。

アイヌのおもしろいところは、毒を操る文化があります。2m 近くなるヒグマを一瞬で意識をもうろうとさせてしまふ猛毒を作る文化です。毒を知っているということは薬を知っているということです。アイヌって働くっていう概念を持たない民族ともいわれます。なぜならば、稲作が伝わってきたら「じゃあ、あなたは農家をしなさい」「あなた

はこれをしなさい」「あなたは服を作りなさい」「あなたはなにをしなさい」と階級や職が生まれると思うんですけど、アイヌの場合は「鍋に火をかけてから狩りに行く」っていうぐらい食べ物もともとあった。それは北海道に限らず、日本列島全土がそうだったっていわれている。鍋に火をかけてから狩りに行けるぐらい食べるということに切羽詰まらないからこそ、働くこととわけずに生活していることがアイヌの場合は多いです。「今日はこれから一週間みんなで大工みたいに家を建てよう」「これからはみんなでこうしよう」とか。薬屋さんもない、それをお金で買う文化もないので薬も自分たちでつくったりします。例えば、「このトリカブトがいいね」だけじゃなくて「3 つ山を越えてこの沢を下っていったこっち側にあるこの溪にあるトリカブトが一番強いんだよ」ぐらいのレベルで何十キロ単位をどこの山のどれがこういう時にはいいのかみたいなものを知っていて、それらを共通に持って毒や薬をつくったりするっていうのがやっぱりおもしろいと思います。

最近話題なのが、大きな製薬会社が当時のアイヌの知恵を使って薬をつくろうとしています。そこにアイヌがぜんぜん絡んでいない。ちょっとブームになっているから、人から見たら利用しているっていういい方になるし、一部のアイヌからはその知恵が広まり、認知されること、私たちが古くから重要視していた植物に需要ができてきちんと育てる場所が増えるのをよく思う人もいます。それぞれですが、そういう文化やある価値を広めるのにいろんな問題が起きつつも広がっている感もあります。

余すことなく食べるのが重要なので、基本的にはオハワをつくります。各家庭2年分以上、貯蔵があったといわれていますが、それを全部鍋物にします。なぜ焼かないのか。「焼いたら油が落ちるから」というんです。家族みんなが囲むことができて、油も残さず最後まで飲み切ることができるからオハワを好んでいたといわれています。ただ、オハワっていう汁物は、日本の米みたいな主食として常に毎日あるもので、地域によっても家庭によってもつくり方も違います。そんな美味しい食べ物もたくさんありますが、工芸もたくさんの方が関わって受け継いで思いを伝えていきます。言語や文化も子どもたちとアイヌ語を

勉強するだけでなく、山に行つて魚を獲つて、山でどうするのかっていうことを一緒に学んだり、二風谷ではいろんな活動が行われています。

学校でもアイヌ文化を学ぶ機会が増えてきたり、新しいデザインとしてアイヌ文化を売り出したりしています。地元だけでやるんじゃなくて、全国の大学生をその場に呼んだワークショップみたいな形で風通しの良さ、あとは自分たちを発信する場を作ること、アイヌルーツを持つ人たちが自身が自分たちのことを再度学ぶような場づくりをしていたり、いろんな行事もあります。

私の大好きな言葉の一つに、「カント オロ ワ ヤクサクノ アランケプ シネプ カ イサム」って言葉があります。天って訳しているんですけど、先ほど話したみたいに、カムイモシリは天ではないんです。あくまでも自分たちのビジネスパートナーみたいなものが住んでいる世界。絶対的な強い力を持った何かがいる場所じゃなくて自分たちに益をもたらしたり、不利益をもたらしたり、いろんな関わり方がありつつも、きちんと向い合ってコミュニケーションをとるべきビジネスパートナーがいる世界から役目がなく下ろされたものは一つもない。野良犬も石も、なんでも役目があってこの世界に下ろされているっていう意味の言葉です。

私も二風谷で生まれ育った強みはたくさんあります。一番は、世のなかの差別を自分のなかで個性や自分の長所として取り込んで、それを発信するこのような立場や場をもらえたことです。途中で話した「痛みを知らない」といわれて、まだまだ知らないことばかりですが、気にしなくてもいいようなことを気にかけられるのは、もしかしたらアイヌとして生まれたおかげかもしれないです。何より自分の役割意識が人から求められて「ありがとう」って言われたり、「頑張ってるね」って言われたりするのすごく嬉しいです。特に、それが家族や地元だったらすごく嬉しいんです。自分が何なのか、自分だから何をできるのかということを考える機会をたくさんくれているのもアイヌだと思っています。

最近では多様性とかSDGsとか人権とか自然とか、アイヌ語にはない言葉を言葉としてカテゴライズして、自分

たちの共通である認識のように世の中に落としてしまう
 ことがあると思います。いざアイヌ文化を見たらそれこそ
 多様な言葉がないってことは、やっぱりそれら
 が当たり前だったからこそだと思います。自然という言葉
 も市町村が「うちの町は何パーセントが自然です」と掲
 げていますが、日本はもともと里山文化で、どこからが
 自然でどこからが何です、人がいるとかっていうものはも
 う少しその土地レベルでいろんな動物植物と関わり合っ
 ていたはずなのに、そこを切り離してしまっていたりしてい
 ると思います。SDGsとかいろんな言葉をあえて語らな
 い、何かを排除したり何かを組み上げないことが少なく
 なる自分たちの発言に言葉に、責任を持っているもともと
 こういう姿勢が見えるのが私にとってのアイヌ語になっ
 て思ったりします。その言葉に触れながら育つことができ
 て今私が考える言葉は日本語ですが、その言葉に触
 れるだけでも私のなかにある当たり前みたいなものが
 変わって自分の強みが秀でてきたりするの嬉しいです。

差別もそうです。差別はもともとそんなに悪くないはず
 のものです。人と差があること、人と違う部分を持ってい
 ることはすごくおもしろくて、私にはカラフルなものです
 ぐ好きです。しかし、差別という言葉は負のイメージが先
 についてくる。実際には、差別として何かを終わらせるん
 じゃなくて、どこから生まれているんだろう、何が違うんだ
 ろう、違っていて何なんだろうと考える必要があるはず。そ
 んなところを教えてくれているのもアイヌなんだろうと思
 います。

<地域や家族、まちづくりについて思うこと>

私は地元が大好きで、その地元のすごいところはみ
 んなが帰ってくるところです。一度は出ますけど、二風谷
 は人口が減っていないんです。平取町は減っていますけ
 ど、二風谷は減っていない。それは地域を信頼でき、子育
 て一つとっても地域の誰にでも預けることができ、各々
 が信頼し合って、各々が自分たちは生きていける自信を
 持てるぐらいその土地を知っていること。多少何かが高く
 なったって自分たちは山に行けば山菜が採れてこんなこ
 とをして生きていけるという自然と環境、人との関わりが
 ある部分かなと思います。そんなところも私には理想だ

と思います。自分たちのことを当たり前のように知ること
 ができる。いまはどうしても学校教育や社会の場で法律
 的なものとか平等という言葉があっても効率を重視する
 ために全員に同じ教育をすることが平等とされてしまう。
 効率のために省かれて、できる人だけを引っ張って、でき
 る・できないの基準がある。私はさみしくて。そんななか
 から平等や効率的から抜けて、各々が自分たちの強み
 を知ることが重要です。それがちよびとずつ地域、まち
 の努力として見える部分が私にとっての二風谷の大好
 きな部分でもある気がします。

<私にとってのアイヌ>

アイヌは、民族という概念を持っていない民族です。今
 でこそアイヌ民族とか和人とか何々人と区切りますが、古
 くは、自分たちが何民族かっていう概念を持ってない
 民族ってたくさんいたはずなんです。だからこそ和人のことは
 隣の人っていう呼び方をしましたし、ロシアも赤い隣の
 人、鼻が赤い隣の人って言い方をしたりするぐらいです。
 アイヌは「人」という意味です。それもただの人ではなくて、
 人間としての人間。人から尊敬されたり、慕われたり求め
 られる人のことをアイヌと呼ぶ。アイヌになるために人間
 は頑張るみたいな。そういうアイヌが先にあったので、誰
 かに「摩耶ちゃん、アイヌとしてどう思う？アイヌとしてなん
 なの？」って聞かれても、私は「いや、あなたもアイヌで
 しょ」と答えるような子どもだったとみんな言います。そのく
 らい、人の肩書や立場、いろんなことを抜きにして人と人
 が当たり前に関わりあって、何がその人にとって嫌なこと
 でいいことかを模索し合えるコミュニティって、すごくあっ
 たかと思っています。そんなことを教えてくれているんだ
 ろうなと思います。

アイヌってよく自然と共生といわれますけど、アイヌ語
 には自然も共生という言葉もない。でもそれらがなくても
 すむぐらい当たり前に関わりあって、何かがその人にとって嫌なこと
 でいいことかを模索し合えるコミュニティって、すごくあっ
 たかと思っています。そんなことを教えてくれているんだ
 ろうなと思います。

いいきっかけ・チャンスを持っているのかなと思っていて、
そういうのを広める活動をまずは知ってもらうことを増や
していけるように頑張りたいと思います。

将来は、アイヌ語の保育園を作りたいと思っています。
時間オーバーでしたが話は終わります。みなさんオ
ンラインなのに、ずっと座ったまま聞いていただいてありが
とうございます。イイイライケレ、ありがとうございます。
(拍手)

＜質疑応答＞

質問者：摩耶さんの講演のなかで、ご家族の紹介があ
りました。あれを聞いていて摩耶さんがアイヌであること
に誇りを感じていると思ったのですが、今まで生きてきた
なかで、アイヌであることによって不合理を感じたとか
差別を受けたという経験はありますか。

摩耶さん：ありがとうございます。まず一つ目です。誇りを
持っているというのはもちろんそうなのと、アイヌのもとの
の自己紹介の仕方もあって、今回は時間も無いと思って
私の紹介をはじめにしちゃったんですけど、もともとは
自分の家族を多いときは13世代とか前まで話したりす
るんですよ。自分はこういう家庭でこういう人たちがい
て自分のひいひいひいひいじいちゃんこんな人でみた
いな話をするんですけど。そういうのもあって今回は
家族の紹介を少しの時間ですけど挟んだりしました。

差別をされた経験は私のなかでは特に感じてなくて、
多分外から見たら摩耶がいわれている、それ差別だよと
か、摩耶がされたそれは軽蔑だよ、偏見だよみたいなこと
を言ってくれる方はいるんですけど、私個人としてはそれ
らを多分差別とか軽蔑とかみみたいなものに、偏見とか
でものに入れ込んでない気がします。それは、先ほど伝え
た、それが差別だって伝えてしまうこと、私自身も絶対に
誰か知らない傷つく言葉をかけたり、無知とか知らない
がゆえに誰かを自分の囲いのなかから外してしまうこと
がある気がするので、私自身は多分いろんなことを言
われても、その分考えたりその分きちんと優しく、いろ
んな人を受け入れられる、認められるような人になりたいと
思うようにしているんだと思います。ただ大きな目で見た、

例えばアイヌとして差別を感じたことがありますかってい
うアンケート調査とかはやっぱり未だに基準は高いです
し、アイヌの犯罪率、生活保護率はいまだに高いとされて
います。さらに、大学進学率もすごく低い。大家族がい
て話をしたんですけど、孫だけでも10人以上いるん
です。同じ地元で夜ご飯とか一緒に食べてる子たちです
ね。ほぼ兄弟姉妹みたいに一緒に育っているんですけど、
そのなかでも大学に行ったのは3人だけみたいな感じ
です。なので環境的にそれを感じるのが難しいというの
は必ずあって、私の場合は恵まれたことに、どんなに嫌な
ことがあっても悔しいことがあっても、とりあえず家族がい
たりとか、知らないのに何か言われたっていう記憶って
いうよりは、「こんなこと言われたんだけどこれは本当なの？」
「本当はどういうことなの？」というのを聞いてそれを自分
の身にするっていう恵まれた環境があったからこそ、こ
ういう性格に育っていると思うんです。私の場合はない
んですけど、社会的にはやっぱり未だにそういうのを感じ
たりそれに対して活動している方っていうのも必ずたく
さんいると思います。

質問：イランカラブテ。摩耶さんは将来二風谷に帰る予
定はありますかということ、アイヌの保育所はどこでし
たいのか、この2点聞かせてください。

摩耶さん：私、矛盾しているかもですが、どこに住んで
いても結構楽しいんです。いろんな人たちにお世話にな
りながら甘えながら、どこに住んでいても楽しいので、な
りゆきかなと思うんです。将来家庭を持って子どもを持
ちましたとなると、二風谷はやっぱりいい環境だと思います。
あそこに戻りたいというのはずっとあります。ただ今やっぱ
り需要として、北海道は未だに強くアイヌっていうものをフ
ラットに入る人というよりは、昔学校でいじめたことがあ
るからまだちょっと罪悪感があるんだみたいな人もいたり、
強くアイヌっていうことに対する何らかのストーリーを持
っている人が多くて、認知を広めるのにハードル、超えな
きやいけないものが多い。それに対して、東京や海外では、
「アイヌってクールだよ」「かっこいいよね」ぐらいそれら
の文化とか持っているものっていうものを評価してくれる

ところも多い。私はやっぱり評価してもらって価値あるものとしてもらって、そこに需要が生まれて、そこを学ぶことに対して需要が生まれることにも供給が生まれて、アイヌ語を学ぶことアイヌ文化を学ぶことが、ただの趣味、ただの自分のライフワークだけじゃなくて、アイヌのことを知っていること、アイヌのことを話せること、何かしらの特技を持っていることっていうのが、仕事につながったり、何らかの資格を取ることにつながったり、もう少しそこにきちんとした見返りがないと、そもそもアイヌ語の保育園を作ったとしても何をしたとしてもそんなに大きく広めていくことはできないのかなと思っています。だからこそ第一に、認知を広めてかっこいいものとしていろんな人に知ってもらうためにも、関東圏もしくは海外での発信を続けていかなきゃと思っています。

保育園に関してなんですけど、北海道でやりますというよりは、やっぱり関東圏のちょっと裸足で教育してほしいですみたいな、そういう自然派教育みたいなことを意識している人のほうが今の状況ではそこに需要があるのかなと思っています。想定しているのは関東から行きやすい場所ですけど、やっぱり二風谷という場所でそれを築くことに一番の価値があるとは思っています。ただ日本なんて変わりやすいなと思っているので、まずは海外からそんな文化あるんだ、かっこいいじゃんなんて言われたならば、一瞬で変わるぐらい行政を動かそうと直接するよりは、日本の先ほど紹介いただいた法律だってそうで、アイヌ側がいくら声をあげても何をも動かないけど、国連が日本何々遅れているねとか、プレッシャーをかけるだけでポロツと政策が変わって環境が変わっていくので、まずは外への発信みたいなものを私は意識しています。

質問：素敵なお話ありがとうございます。ニポポ人形をご存知ですか、みなさん。アイヌとは何か関係がありますか。

まや とうじ ほっかいどう かにぞく はや じだい ねんちか
摩耶さん：当時、北海道カニ族が流行った時代、40年近く前に、たくさんのアイヌ含め和人もみんな北海道を観光としてもものづくりをしていた時期がありました。その時期に

できたのがクマの木彫りやアイヌの女性とか男性が写っているレリーフみたいな壁にかけられる木彫りやニポポといわれるそういう夫婦人形とか、コロボックルとかが流行って需要ができました。それが産業としてたくさんの方がつくっていて、実際にアイヌもたくさんつくっているのでアイヌの工芸ともいえるんです。けど、実際にはアイヌは人や動物を持たさない、彫ったりもしない、絵を描いたりもしない民族なので、模様にもしたりしない。実際にはあまりアイヌがはじめたものっていうよりは観光客に流行るからというので、和人の土産屋さんがアイヌに働かせてつくらせて売っていた場合が多かったです。実際にアイヌの知恵を使ってつくられて、どこの木のこういう木材がいいとかは全部アイヌとの関わりがあってつくられているので、アイヌのものっていう人もいます。ただアイヌプリアイヌの精神ではないという人もいます。当時やっぱりひどい働かせ方、ほとんどタダ働きみたいな感じで何十個も彫らされた。そして全部持っていくのは売り手の和人だったみたいないわれもあったりとか。各々言っていることは違いますが、北海道の当時の観光ブームのお土産として、今もいろんなところでいろんな人たちが持っていたり、北海道といえばクマの木彫りとかニポポとかって思われる方も多い気がします。

質問者：1,2年前、zoomで在日の人とのコラボした企画のときにお会いさせてもらった、神戸に住んでいる箕田といます。兵庫県立湊川高校という夜間定制高校で人権教育推進教員をしています。感想というか思っていることをしゃべらせてもらいます。明治以降、淡路島、兵庫からたくさん北海道静内地方に移住してきた人が多くおり、アイヌの人とダブルで生まれた人もいて、このなかには10年くらい前に亡くなったらしいんですけど、秋田春蔵さんというアイヌ民族の解放運動のリーダーもいたと淡路の郷土史の冊子に書いてありました。人権課題で部落問題とか在日コリアンの問題とか障害の問題とかハンセン病とかありますが、アイヌの問題を兵庫県で取り上げる時には、淡路とアイヌの人びとのことは避けて通れないと思うんですけど、兵庫県や教育現場で語られる

ことがないんです。僕も知ったのが5,6年前でした。原田公久枝さんが中学生のときに書いた差別とか人権とかアイヌのことにするいじめの作文があって、全国で有名だったんですけど、それをずっと教材として使っていたんで、原田さんに直接お会いしたいということで去年6月、京都で行われた講演会に行ったんです。その後の懇親会で原田さんからアイヌの就職のときの差別を具体的に伺いました。すごいショックな話でした。西日本では進路保障ということで就職とか進学とかの履歴書で違反質問させない取り組みを積み上げてきたんですけど、北海道の原田さんの場合は全然真逆の差別の現実の話だったから、それが1985年か86年頃の話だったんでびっくりしたんです。

ぼくは、一回も北海道行ったことないんです。だから北海道に行っているいろいろなものに触れたり、話を聞いたりして、兵庫との関わりとか、あるいは在日韓国人・朝鮮人とアイヌの人とのダブルで生まれた人がアイヌ文化を継承されていることを苫小牧駒澤大学元教授だった石先生がタイトルは忘れたんですけど、本で書いていたんで北海道に行ったときにあちこち巡ろうと思っています。北海道でアイヌ関係のところで、ここは絶対行ったほうがいいんじゃないかというところがあれば、教えていただければ幸いです。

摩耶さん：ありがとうございます。北海道は移民、未だに問題はありますが、静内だけではなくて私の地元も隣町なので、淡路からの移住者は多くて地元のスーパーで淡路の海苔が売られていたりするくらい淡路文化は残っています。方言も北海道内であっても、この地域の方言が強いみたいなのがあって、地域によっては香川の言葉を話しているような集落があったり、地域によって方言差もあったりするくらい。お雑煮も北海道内でも全部違うんです。みたいなのが北海道なんですけど、やっぱり受け取り方とかその地域によって全く違いますね。私の地元の場合は、いきなり北海道という寒い地域に行ったら家の建て方もわからなくて苦労した時にアイヌが全部助けてくれたからすごくアイヌとはいい関係を築いていたって人もいれば、アイヌの助けなしで生きていけなかったって

う人もいます。自分たちじゃ子どもをこの土地じゃ育てられないから子どもをアイヌの家に捨てるみたいなこともたくさん起こっていました。実際に今、生きている人たちのなかでも、アイヌに育てられた和人っていう人もたくさんいます。地域によってどういう関わり方をしてきたのか、どのぐらいの対等性だったのか、どのぐらい偏見があったのかというのは違ったりするので、一概に「アイヌだから差別されています」というのは私のなかでは全然違うと思うのが伝えてきているものです。

あと私のなかで重要なのは、どの時代にも必ず絶対優しい部分があるところなんです。アイヌ語を話したら罰せられても何があっても家庭内でこそアイヌ語を話すとか、アイヌ語を残したいから子どもにアイヌ語を話そうっていうことができたはずなのに、あえて子どもたちの前では絶対にアイヌ語を話さないっていう親がたくさんいました。それはやっぱり子どもたちのことを思って、この子どもができるだけつらい思いをしないように、苦労しないようにとかいろんな優しい思いがあって、愛情があって、今の文化とか今の私たちがいる。なので一概に私がつらい思いをしましたなんて、その優しさの上で成り立っている私はあまり口にしたくないんですよね。だからこそアイヌっていうもののイコール誰しもが差別とか何かと闘わなきゃいけない立場にあるマイノリティっていうものじゃなくて、あくまでも人間の一人としていろんな個性とかいろんな差を持ちつつも、それぞれが抱えているものだったり課題だったり見えている方向だったりとかが違うっていうのが私の中の価値観です。だからこそ学校教育の場であって欲しいものは、アイヌっていうものを教科書の中とか何かに出てくる他の人たちっていう感覚をできるだけ薄くしてほしい。それが私の中の一つで、当たり前のように今アイヌなんて日本中いろんなところ、むしろ世界中いろんなところと交ざり合っているところと生活している。私もそうだったんですけど、高校でアイヌのページが出てくるのが未だに、私の当時は3行ぐらい、アイヌ民族についてとかジャクシャインについてとかしかなかったんですけど合計で1ページですね。それを話した時に、全部過去形で書かれていたんですよ。でも、

アイヌにルーツを持つ私がその教室で参加しつつも
過去形で書かれている。それに違和感を抱かない
空間っていうものがやっぱりたくさんあってしまう。それは
アイヌに限らず日本の教育どこだって基本的に中心的
な部分とか、あとは受験のための教育はなされています。
ノウハウはあっても、それ以外の各個人が持っているもの
を、掘り下げていくっていう環境はあまりまだ整っていない
のかなって感じてしまう部分が多い。アイヌっていうもの
を通じてただアイヌを伝えようとするんじゃなくて、実際に
アイヌにルーツを持つ人たちと文通してみるとか、あえて
講演会とかじゃなくて、ただ一緒にレクをしてみるぐらいと
かでもいいと思うんです。今その場にいる人たちとして捉
えられるような場所が増えていったらいいかなっていうの
が願いですね。

原田公久枝さん、私もすごく小さい頃から仲良くて、
「ママママ」って言われて、私も「キクちゃん」とかって呼
んでいます。公久枝さんはどちらかというと自分が受けた
体験を通じて、いろんな人たちに今の社会のあり方に対
する違和感を伝えている人です。私と育った環境も
全然違う。アイヌだからといって必ずどっちが正解とかも
なくて、そういう全然違う人たちが当たり前と同じように
いるっていうことも知っていただけたらいいかなと思ったり
します。実際に行って話していただきたいのは、本当にそ
れぞれが違うストーリーを持っているので、何を知りたい
のかっていうのをはじめに明確にして、いろんな人に話
しかけて、こうこうこうでこういうことを知りたいんですって
いうのを伝えていけば、たどり着いていくところが正解な
のかなって思うんです。でもまずは国の政策っていうのを
見るために、ウポポイは行ってみたらいいと思います。これ
はいい意味でも悪い意味でもなんですけど、あくまでも
国で大きなお金が働いているときの文化の見せ方とか
文化の消費の仕方っていうものがあそこの場合はあると
思うんです。そこで働いている当事者たちの表情だっ
たりとか、いろんなものをきちんと見ていくっていうのは
北海道に行くのであればやっぱりお勧めかなって思うの
と、あとは普通に楽しむのであればいろんなそのものが

根付いている地域に足を運んで、いろんな人と話してみ
るとかがいいのかなと思います
ビジネスは下手でも、着飾らずに古くからその土地で
根付いている誰かの家に夜ご飯を食べに行ったらお母
さんが刺繍をしたりとか、お店は構えてないけど各
家庭がみんなそれをしているみたいなのところも、場所とし
てお勧めです。ぜひ足を運んでみてもらえたら嬉しいで
す。ありがとうございました。

質問：感想と質問です。感想は、僕たち自身も部落問題
という部分でマイノリティ性を抱えながら普段若い青年
層のメンバーで集まって活動をしているんですけども、
今日のお話を聞くなかでとても印象に残ったのが、すご
いポジティブに捉えられているなっていうのが聞いていて
楽しく感じました。僕自身、部落問題をポジティブに捉え
て発信していきたいなと考 えている部分もあるので
勝手に通じるところがあるなと思いながら聞いていました。
どうしても部落問題ってネガティブに捉えられたり、
マイナスに発信されていたりするんで、そういうところを変
えていきたいと思っている部分があるので、とても同じ
感覚になったというかそういうふうに思いました。

あとは「アイヌとして生まれたおかげ」っていう発言が
あったと思うんですがそこにもすごく感動したというか、と
ても心に響きました。ありがとうございました。

質問です。今言ったみたいに僕たちも活動を普段して
いるんですが、話のなかで言われていた大学生を呼ん
で風通しをよくしたりアイヌのことを語れるようにというこ
とがあったと思うんですが、具体的にどんなことをして
らっしゃるのか参考までに何かあれば教えていただきた
いと思います。

摩耶さん：個人として意識してやっていることは、メディア
との交渉です。どうしてもメディアとか大きな力が働くも
のって無責任になってしまうところがあります。働いてい
る各々はすごく素敵な方が多いんですが無責任になっ
てしまうことが多いなかで、そこにきちんとした規定を作る。
例えばNHKでドキュメンタリーを撮りたいという時に
「知ってもらえるんだからタダでいいですよ」じゃなくて、

日拘束いくらという規定をつくる。私を仲介して私から紹介する人にはこの規定で今後お願いしますみたいな規定作りをします。ボランティアで続くものじゃなくて、価値のあるものとして供給し続けられるような規定作りを基盤にするようなことは心がけています。いろんなテレビ局もそうですし新聞もそうですしイベント会社とかもそうですね。代理店も含めてそういう仲介業みたいなことを普段は仕事としてやったりしています。規定を作り、後から「ああだった、こうだった」と言われないようにきちんと残る形で規定作りをしています。あとは先ほどから話している需要がないと、生活していくのにいっぱいはいっぱいなのに、生活して仕事が終わった後に自分の文化を学んで自分の地域を学んで何なのか発信し続けるってすごくつらいことになってしまうことが多いと思うので、そこに対する需要を作りたいっていうので、そこへの持ちかけです。林業の話だったらそれこそアイヌの特性を生かしてこういうことができるよみたいな企業に対する提供もですし、そこに対する流れの取り組み真似をして、あとは他の人に任せるみたいな。そういうあくまでもボランティアにならずに継続していけるような形作りを個人としては意識しています。あとは、「カッコいい」っていう見せ方、とりあえずカッコいいって思ってもらって興味を持ってもらえるようなカッコつけ続けることみたいなのは意識しています。「摩耶ちゃんみたいになりたいね」とか「摩耶ちゃんなんて悩みもないんでしょう」ぐらい言われたら勝ちだなんて思うぐらいそういうのは意識しています。

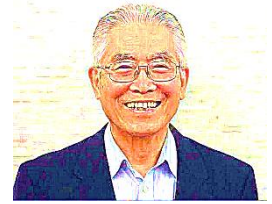
もう少し具体的に町レベルの政策でいうと、平取町は国からの交付金もありきなんですけど、おもしろいのは地域連携ワークショップっていう先ほどちらっと出していた大学生の取り組みがある。日本全国の大学生、国外でもいいんですけど、大学生を呼んで町が宿泊費や食費全て負担して交通費だけ実費で出していたら学生たちを呼ぶ。4日間ぐらい丸々町ができる農業も工芸も食文化も言語もいろんなワークショップを一日中やるんですよ。わざと学生たちに同じところで住んでもらってどうだったかっていうリフレクション、ふりかえりを毎晩受けてもらって、最終日に自分たちがここに住んだら

どうするかっていうビジョンみたいなものをプレゼンしてもらって会を設けています。地元の若者たちがそれを運営するというところで交流になって、こういう意見があるんだとか人口を増やすために住居を増やすにはこうしようとかかっていうものが見えてきている。一案としてすごくおもしろいかなって思ったりします。若者がそういうものを興味を持って発信していくためにとか、表現していくためにどんなことを具体的にしていますかということであれば、やっぱり自分たちのことを学ぶ環境づくりですね。無料で町がそういう講座みたいなものを開いて私の地元の生活感ってすごいな稼働率は全道一位ぐらい毎日のようにワークショップがある。アイヌ語を学びたいければ毎日無料で通えてなおかつ町自体がオープンになると、何か講座があって先生は一人だけどもそこをアシスタントしたいですっていう人がいれば何人でもアシスタントで入れるようになっているのでアイヌ語の子ども教室も子どもたちと同じ数ぐらいボランティアのアシスタントがいるんですよ。オープンになって地域が世代問わずいろんな方面に関わっていくみたいなのはいいように作用しているのかなと思っています。

あとは分業しすぎないことってすごい大事だなと思っています。よくある市町村のものとしては産業とそういう文化的活動みたいなものって切り離されてしまうんです。しかし議会予算を動かすところは同じところなので、そこが結びついていなければ、どうしても観光業とか文化とかそういう地域学習に予算がおりにくいと思う。第一産業とか含め産業と自分たちが連携して常にイベントとか出すってなってもどちらか片方で行ってしまうじゃなくて、商工会や農業組合に声をかけて一緒に出展したりとかして、こういうところでお互いに農業の若者と文化発信をしている若者が一緒にコラボして野菜とかジュースとかのパッケージをラベリングするとかそういう具体的な若者同士がそのジャンルを越えて制作をして作り上げて成功するみたいな体験を作るっていうものはすごく平取町がうまいかなって思ったりします。

連載
Vol.14

けんぞうの視点



『全国部落調査』復刻版出版事件に関する東京高裁判決の評価と今後の課題

～「差別されない権利」を認めたが課題も残された

友永健三さん(公益財団法人 住吉隣保事業推進協会理事長)

今号の「けんぞうの視点④」では、去る 6月28日に出された『全国部落調査』復刻版出版事件に関する東京高裁第16民事部(土田昭彦裁判長)の判決を取り上げます。その前に、事件の概要、東京地裁への提訴、東京地裁判決、その評価と問題点、東京高裁への控訴について、ごく簡単に触れておきます。



写真は部落解放同盟大阪府連ウェブサイトより

事件の概要

2016年2月、神奈川県川崎市にある出版社・示現舎(実体は2名の個人)が『復刻 全国部落調査 部落地名総鑑の原点』(復刻版)を出版しようとした(同年4月1日出版予定)。このため、部落解放同盟中央本部(中央本部)がAmazonに販売中止を申し入れ、2月10日販売中止が認められました(すでに53冊の予約があった)。

それでも、示現舎側が出版は必ず実現すると公言したため、同年3月22日、中央本部が横浜地方裁判所に

出版差し止めの仮処分を申請、3月28日認められました。

これに反発するかのよう示現舎の代表は、ブログ名を「鳥取ループ」と名付けたウェブサイト上で、①「全国部落調査」自体と復刻版の電子データ、②「部落解放同盟関係人物一覧」(部落解放同盟の関係者、およそ1,800名の名前、役職、住所、電話番号等を掲載)を公開したのです。

東京地裁へ訴訟の提起

中央本部の西島藤彦書記長(当時)による示現舎・鳥取ループ代表に対する説得、横浜地裁の仮処分等によっても、全国部落調査や復刻版の販売やインターネット上の掲載をやめようとはしなかったため、2016年4月19日、解放同盟と211名の個人が鳥取ループ・示現舎を相手取って東京地裁に民事訴訟を起こしました(その後、訴訟参加者が増えて最終的には、解放同盟と248名の個人)。

裁判で求めた内容は、以下の諸点です。

- (1)「全国部落調査」復刻出版の禁止
- (2)以下のデータのウェブサイト上での公開の禁止(削除)

- ①「全国部落調査」や復刻版の電子データ
- ②「部落解放同盟関係人物一覧」の電子データ

(3) 上記①②について、一切の方法での公開禁止
(自ら又は代理人もしくは第三者を介しての行為も
禁止)

(4) 以下の権利侵害に対して原告1名あたり 110万
円の損害賠償請求

- ①プライバシー権(個人情報コントロール権)の侵害
- ②名誉権の侵害(部落差別が現存する下では社
会的評価を低下させる)
- ③差別されない権利の侵害

東京地方裁判所判決(2021年9月27日)・骨子

訴訟を提起してからおよそ 5年半後の、2021年9月
27日、東京地裁は以下に列挙するような判決を出しま
した。

- (1) 「全国部落調査・復刻版」のうち 25都府県の部
分については出版、販売、頒布してはならない。
- (2) ウェブサイト「全国部落調査」の画像ファイルのう
ち 25都府県については削除せよ。
- (3) ウェブサイトの 25都府県については、今後ウェブ
サイトへの掲載、書籍の出版、出版物への掲載、放
送、映像化など一切の方法による公表をしてはなら
ない。
- (4) 被告は、原告219名に対して合計488万円の損
害賠償金を支払え。
- (5) 被告らの反訴請求は棄却する。



東京地裁判決で評価できる点

この判決で評価できる点は、以下の諸点です。

- (1) 判決は、「復刻版」について、被差別部落の地名
のみが記載された一覧表であっても、その公表は
身元調査を容易にする行為であり、原告ら個人の
プライバシー権・名誉権を侵害する違法な行為とな
ることを認めたこと。
- (2) 被差別部落の一覧表の公開は人格権(プライバ
シー権、名誉権)を侵害する行為であり、損害賠償
に加えて公表の禁止(差し止め)も認められると判
断していること。
- (3) 「復刻版」の公表に加え、「人物一覧」の公表に
ついても公表による損害賠償を肯定していること。
- (4) 示現舎による「復刻版」の出版差し止めは、研究
や表現の自由を制限するものではないことを明確
にしたこと。

東京地裁判決の問題点

一方、東京地裁判決の問題点としては以下の諸点が
あります。

- (1) 差別されない権利を認めなかったこと。
判決は「プライバシーの侵害」や「名誉の侵害」は
認めましたが、「差別されない権利」に関しては権
利の内実が不明確で判然としないうとして認めませ
んでした。
- (2) アウティング(本人の同意を得ずに部落出身者で
あることなどを公表すること)の被害については鈍
感な判断をしていること。
- (3) 現在の住所地・本籍地が該当地区にかかわる原
告のみの救済にとどまったこと。
- (4) 「復刻版」全体の差し止めを認めず、一部の県を
差し止めの対象外としたこと。
判決は、プライバシー侵害と名誉権の侵害のみを認
めた結果、「復刻版」全体の差し止めを認めず、権利
侵害を認定した原告が存在する都府県のみを差し止
めの対象としたことは、最大の問題です。具体的には、

①原告がいなかった10県(秋田県、福島県、茨城県、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県、石川県、福井県、徳島県)、②原告はいたが、プライバシーの侵害が認められなかった6県(千葉県、富山県、三重県、山口県、佐賀県、長崎県)、合計16県が差し止めの対象とはされなかったのです。

東京高裁への控訴(2021年10月11日)

東京地裁の判決を受けて解放同盟と原告団は、地裁判決は評価できる点はあるものの問題点が残されているため、2021年10月11日に東京高裁に控訴しました(控訴理由書は2022年3月24日提出)。その際、以下の諸点を求めています。

- (1) 差別されない権利の承認
- (2) 「復刻版」出版の差し止め
- (3) インターネットからの①全国部落調査や復刻版の電子データ、②「部落解放同盟関係人物一覧」の電子データ等一切の差別データ削除
- (4) 原告全員に対する損害賠償

東京高裁判決(2023年6月28日)の骨子

6月28日に下された東京高裁の判決の骨子は、以下の通りです。

- (1) 差別されない権利を認めたこと。
- (2) 「復刻版」出版の差し止め、インターネット上からの地名等の掲載の削除の対象を地裁段階の25都府県から31都府県へと拡大したこと(拡大されたのは、茨城、三重、徳島、山口、佐賀、長崎の6県)。
- (3) 損害賠償支払いの対象者を219名から227名に拡大したこと、また損害賠償の金額を約488万円から550万円へ拡大したこと(原告は死亡などにより判決時点で235<うち個人は234名>名に減少している)。
- (4) 上記、(2)と(3)へと拡大した論拠として、権利侵害を被る原告の判断に関して、「現在の住所・本籍が該当地区にある人」だけでなく、「過去にあった

人」、「親族の現在の住所・本籍、親族の過去の住所・本籍が該当地区にある人」にまで拡大したこと。

(5) これまでの取り組みによって改善されてきたとはいえ、今日もなお部落差別は現存していることを地裁判決よりも踏み込んで認めたこと。

(6) 原告の存在していない10都府県に関しては、出版禁止、インターネット上への掲載禁止・削除を認めなかったこと。

(7) 部落解放同盟への損害賠償と、自らが部落解放同盟員であることを公表している活動家に関しては損害賠償を認めなかったこと。

東京高裁判決でとくに評価できる点

上記に列挙した骨子の中で、評価できる点は(1)～(5)までですが、とりわけ重要なのは(1)の「差別されない権利」を認めた上で、「本件地域情報の公表の禁止や削除、損害賠償といった法的救済」を認めたことです。この点に関して判決文要旨では次のように述べています。

「憲法13条、14条1項の趣旨等に鑑みると、人は誰しも、不当な差別を受けることなく、人間としての尊厳を保ちつつ平穏な生活を送ることができると人格的な利益を有しており、これは法的に保護された利益である(太字は引用者)。部落差別は本件地域の出身等であるという理由だけで不当な扱い(差別)を受けるものであるから、これが上記の人格的な利益を侵害するものであることは明らかであるが、当該問題の根深さ、不当な扱い(差別)を受けたもののその後の人生に与える影響の甚大さ、インターネット上における識別情報の適示を中絶とする部落差別の事案は増加傾向にあること等に鑑みると、本件地域の出身等であること及びこれを推知させる情報が公表され、一般に広く流通することは、一定の者にとっては、これにより平穏な生活を侵害されることになること、これを受忍すべき理由はないから、本件地域の出身であること及びこれを推知させる情報の公表も、上記の人格的な利益を侵害するものである。」

「本件地域の所在に関する情報である本件地域情報」は、これのみをもって又は他の情報と相いまって、本件地域の出身であることを推知させる情報となるものであるから、本件地域情報の公表により本件地域の出身等を理由に不当な扱い(差別)を受ける恐れがあるものは、上記の人格的な利益に基づき、本件地域情報の公表の禁止や削除、損害賠償といった法的救済を求めることができる」と解される。」

また、上記(4)の(2)と(3)へと拡大した論拠として、権利侵害を被る原告の判断に関して、「現在の住所・本籍が該当地区にある人」だけでなく、「過去にあった人」、「親族の住所・本籍、親族の過去の住所・本籍が該当地区にある人」にまで拡大したことも東京高裁判決で高く評価できる点ですが、判決要旨では以下のように言及しています。

「一方で、上記の人格的な利益に基づき法的救済を受けることができる者は、本件地域の出身等を理由とする不当な扱い(差別)を受け又は恐れがあるものであるが、本件地域の出身でなくても、本件地域での居住や本件地域に系譜を有することによっても生じ得るものであり、現に本件地域に住所又は本籍を有する場合はもとより、過去においてこれらを有していた場合、両親や祖父母といった親族が本件地域に住所又は本籍を現に有し又は過去において有していた場合においても、不当な扱い(差別)を受け又はそのおそれがあるから、①本件地域に現に住所又は本籍を有する者、②過去において本件地域に住所又は本籍を有していた者及び、③親族が本件地域に住所又は本籍を現に有し又は過去において有していた者は、上記の人格的な利益に基づく法的救済を受けることができる(太字は引用者)」というべきである。」

なお、このような判断は、「戸籍を遡って取得し、被差別部落出身者かどうかを判断しようとする」形で「行われる身元調査の実態を直視したものといえます。」

東京高裁判決の問題点

東京高裁の判決の問題点は、上記判決骨子で列挙したうちの、(6)原告の存在していない10都府県に関しては、出版禁止、インターネット上への掲載禁止を認めなかったこと、(7)部落解放同盟への損害賠償と、自らが部落解放同盟員であることを公表している活動家に関しては損害賠償を認めなかったことです。

この内、とりわけ(6)については、重大な問題です。なぜならば、原告が存在していない10都府県(秋田、福島、山梨、千葉、静岡、愛知、岐阜、石川、富山、福井)についても部落差別は存在していることは否定できないからです。

今後の課題

東京高裁の判決を受けた今後の課題としては、以下の諸点があります。

- (1) 各方面で東京高裁の判決の学習、宣伝を行うこと。
- (2) 中央本部は、すでに上告することを決めています。が、最高裁で原告が存在していない10都府県についても差し止めや削除が認められるよう運動を盛り上げていくこと。
- (3) 最高裁で解放同盟に対する損害賠償や自らが部落出身者であることを明らかにし活動している人に対しても本人の同意なしに部落出身者であることをインターネット上で公表していること(アウティング)に対する損害賠償を認めさせること。
- (4) 部落差別解消推進法の改正や包括的差別禁止法の制定を求めていくこと。これらの中に差別されない権利を明確に盛り込むこと。

すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしんきょうかい
住吉隣保事業推進協会のうごきひょう ぎ いんかい かいさい
評議員会の開催

すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしんきょうかい ひょう ぎ いんかい
住吉隣保事業推進協会の評議員会が、2023年
6月14日午後6時30分から開催されました。今回は、
5月24日に開催された理事会につづき、主に 2022
年度事業報告、決算報告が審議されました。

2022年度は、水平社創立100年記念行事に取
り組んだこと、反戦と反差別のシンボルであるオガリ
像が隣保館に設置されたことなどが報告され、事業
全般に対してふりかえりと検証が行われました。

十分な審議の後、すべての議案について、満場一
致で承認されました。

き ふ れい
ご寄付のお礼

2023年6月1日以降にご寄付をいただいたみな
さまです。みなさまのご協力に感謝いたします。

【神野尚実さま、藤本俊彦さま、他ご本人の意思によ
り、3人の方がお名前非公開】 合計47,000円

【2023年度寄付目標金額：150万円】

当法人では、総合生活相談（無料法律相談含む）、
自主学习支援事業、就労支援事業、居場所・食育
事業、識字・日本語教室支援、公益貸室事業、図書
事業、人権教育推進事業などを公益目的事業とし
て実施しています。これらはみなさまのご寄付によって
支えられています（個人・団体から受け付けていま
す）。いただきましたご寄付は、法人で実施するこれら
の公益目的事業の経費、住吉隣保事業推進センタ
ーの維持管理に使わせていただきます。わたしたちの
取り組みに、ご理解とご協力をぜひお願いします。

なお、公益法人に対してご寄付いただいた方は、税
制上の優遇措置を受けられます。寄付額に応じて、
個人または法人の所得から一定額が控除されます
（くわしくは事務局までご相談ください）。

き ふ ほうほう
【ご寄付の方法】

銀行振込、または直接事務局へご持参ください。
ご寄付の際には寄付申込書に必要事項をご記入い
ただきます。

き おきょく すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしん せん た
<事務局> 住吉隣保事業推進センター

住所：大阪市住吉区帝塚山東 5-6-15
電話：06-6674-3732

ふりきみさきこう ざ
<振込先口座>

大阪信用金庫 住吉支店（店番号041）

普通口座（口座番号 0115047）

口座名義 公益財団法人住吉隣保事業推進協会

さんじょかい いん ぼ しゅう
賛助会員を募集しています！

賛助会員を募集しています。加入していただけれ
ば、当法人の活動をまとめた機関紙『すみりんニュー
ス』をお送りします。また、当法人主催の指定講座に
参加費半額免除でご参加いただけます。

<年会費> 個人：3,000円 団体：10,000円

もう こ ほうほう
【申し込み方法】

所定の申込用紙に必要事項をご記入の上、年会
費と一緒に当法人にご提出ください。

じょうほう はいしん
情報を配信しています！

ホームページ

すみよし隣保館

で検索



Facebook

すみよし 寿 フェイスブック

で検索



Instagram

@sumiyoshi_kotobuki



YouTube